

社会科学のパラダイム転換の必要性(2)

——モダニズムの「ニュートン型社会科学」より、

「ポスト・アインシュタイン」のホリスティックな社会科学への転換を

筑波大学社会科学系 小林 彌 六

思想・学問のパラダイム転換の必要

世界史の現在においては、私達人間の現実の生き方・考え方に強い影響を持つ社会思想・社会科学において、コペルニクスの発想の転回が求められているのではないだろうか。勇気を持って未来を切り拓く努力をせねばならぬのではなからうか。資本主義と共産主義に代わる「第三の道」として友愛主義、『新ユートピア経済学』¹¹「新しい経済学」(たま出版)などは、このような報告者によるパラダイム転換の努力の産物である。

今回取り上げさせていただくのは、在来の(特に20・19世紀の)機械論的で一元論的・還元主義的・物質主義的で経験主義的な、「部分知」に墮しやすく、価値観回避の、血が通わぬとも言える社会科学から、21世紀に向けての「社会科学のパラダイム転換」、宇宙・地球・人間・社会、相互浸透的・ホーリスティックな社会科学への転換が必要である。今日、世界的に自然科学の世界でも、人文科学の世界でも、さらには実際界でもパラダイムの転換が盛んに唱えられている。文明の転換期にあたり、新たな「時代精神」(Zeit-Geist)が求められているのである。

今日、各種の統合化（自由化）、市場経済導入による資本主義（市場経済）のグローバル化、リージョナル化によって、開発と前に変わらぬ経済成長指向が見られる。この動向については、21世紀において現在の個我的・利己的・物質主義的な「欲望経済」と「欲望政治」と欲望人間がなお作動しつづけると、生態系破壊・環境破壊・資源問題・人口問題・食糧危機のさらなる進展により、経済成長が地球（自然）の天井（シーリング）に突き当たり大変なクライシス・崩壊に直面せざるをえないことを予測させる。これは現代の人類が地球や資源をたんなる物質と思ひ込み、それらが心を持つ「生き物」であるといえるかもしれぬ存在であることが分からなくなり、忘れていた結果でもある。

また、現在のグローバリゼーションは世界的な弱肉強食の「大競争」を生み出しているから、世界的な規模での経済の寡占化ないし独占化・「世界金融資本」（World Financial Capital）による地球経済の管制高地掌握をもたらす可能性大であろう。これは各種国際会議・国際機関のパワー・アップや大国の覇権と結びつき、第一次世界大戦後から顕著になり、ある意味では世界を動かしてきたといえる「世界超帝国主義」、世界金融資本による世界政経独占体制が確立する可能性大であることを示している。世界経済の眞の主人公は歴史的に広く濃い国際的なネットワークを持つ国際金融業のコングロマリットであることを、経済学も遅れ馳せながら直視せざるをえないのである。経済学は19世紀以来世界の眞の覇権者たる、この世界金融資本や同盟する帝国主義つまり世界超帝国主義の存在に沈黙し眼をつむってきたものと思える。これに注意を促す努力をした点では、ホブソンの『帝国主義論』やゾムバルトの業績はまことに偉大だといえる。ついでながら、資本主義の成立をめぐる「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」や社会科学方法論についてのM・ウェーバーの論には、そのモダニズム的な浅さが問題になろう。

モダニズムの社会科学の限界と歪み

現代世界の構造や動向をリードしてきた有力な要素は18〜20世紀の社会科学である。とりわけ19〜20世紀の社会科学である。これが人々の考え方や、思考回路や価値観に影響を与え、個人生活や社会・経済・政治に強い影響を与えたことはいまさら説くまでもない。

モダニズムの社会科学はモダニズムの世界観や社会観や人生観や心得を、教育や言論活動や教育を通じて世界や社会に対し撒布してきた。また、現在も与え続けている。ここから現代の社会科学は現在の世界や日本の混乱や閉塞状態にたいしてかなりの責任があると解される。モダニズムとは第二次世界大戦後にあつては、アメリカニズムと云い換える事も出来るかと思われる。一口に社会科学といっても、広くは、経済学・社会学・政治学・法学・人類学・歴史学さらには哲学等いろいろの学問がある。

ここでいくつかの点をあえて指摘させていただくと、これらのすべてというわけではないにしても、多くが「疎外された社会科学」・疎外された学問や思想の姿をとっていることである。これは何をさすのか。疎外ということからすると、対象の本質を見失っている可能性がある。これまで各種の学問で重視され、いろいろな巨匠とされている人々が唱えていたことが、本質性を見失っていた可能性があるということである。

いくつかの例を挙げてみる。M・ウェーバーは社会学の分野で方法的個人主義を唱え、その延長上にあるパースンズなどととも、社会学ないし社会観ひいては人間観に大きな影響を与えてきた。このような分離主義的な自我主義的な思考方法は、人類レベルでも宇宙レベルでも類的存在ともいえる人間の自己了解にきわめて大きな歪みないしは過ちをおおがかりに持ち込む結果になったと思われる。ロック・ヒュームなどの政治学でも同じ誤りが犯されてい

る。A・スミスの（スコットランド啓蒙の子である）個人的な欲望・富の追求肯定には大きな過ちが犯されている。経済においても、個人的な悪は公的な善になるはずがないのである。無制限の物質追求や快適・効率性指向が正しいとしたのは、人類の長年の道徳や自己抑制にたいする彼の挑戦だったわけだが、この誤りは現在の地球環境破壊やカネがすべての人心の荒廃、社会や家族の崩壊傾向や犯罪増加・戦争の頻発が明瞭に物語っている。人類は、肉体の便宜と快楽（肉欲・『聖書』）のために地球や生き物や森林・山岳・河川・海洋と自らの心を、毎日食べながら生活しているともいえる。これは、個人あたりのGNPの増加の代償だと無視できるような生易しいものではない。スミスの誤謬はケインズによっても訂正されなかった。さらにW・ロストウ流の成長至上主義・開発至上主義、また経済学が掲げる効率至上主義、スケール・メリット至上主義はグローバリゼーション・自由化のかたちで、人類と地球を破壊の淵に追い込みつつある。K・マルクスは19世紀の人らしく、宇宙の究極存在を否定し唯物主義をとった（フォイエルバッハのヘーゲル批判は底が浅いものだった）。さらに唯物的な歴史観・史的唯物論や唯物主義的な社会観を主張した。これは極端に感覚主義や経験論に引っぱられた思想で、その偏狭性が今日あらためて問題になっている。レーニンについては「超帝国主義」（帝国主義の同盟、パックス・コンソルティス、世界金融資本）の存在についての異常ともいえる否定姿勢が、人類の現実認識や世界認識を20世紀に大きく歪めた可能性がある。この点はマルクスが国際金融業の世界支配力について殆ど沈黙し、生産重視姿勢を取りすぎたことに関係があるかもしれない。ついでに記すと、資本主義が世界資本主義で金融・商業・帝国主義主導型で生成し、現在もそうであるだろうことの認識の眼が、経済学で伝統的に曇らされてきたことは（ゾムバルトが指摘するように）、大いに反省されてよいだろう。

経済学の偏向性が見本になり、アメリカニズムの計量政治学や国際政治学（ゴールドスタイン、ギルピンらによつ

て、コンドラチエフ循環やウォーラーシュテインの世界システム論さらにはトインビーらの覇権国家交代論と絡ませて世界戦争循環説が唱えられ、国家は唯物的に行動するたんなる無機的な物・要素・アクターであると仮定される）、国際政治学や国際政治経済学などでは、国家がたんなる原子ないし要素・無機的な物とみなされ、ゲームの理論が多用されている。極めて非人間的な学問がアメリカを中心に展開されている。国際経済学では効率至上主義の無国籍的な没倫理的な思考が中心である。このように人間を扱う社会科学で、機械論的な、資源利用の、効率や力がすべて（人間・労働は資源としてたんなるものとして計算されることが多い）といった没倫理的な・形而上学を欠いた学問が族生する結果になっている。人間らしい暖かい心や地球・宇宙との調和原理を理解しない、工学的な学問や理論が今日の政治・経済・社会・国際・外交関係、世界経済・世界政治・安保保障（軍事）などをリードする形勢になっているのは、まことに憂慮される事態である。

以上いくつか具体例を挙げたことから推定されたとおり、19世紀と20世紀の主に形而下的・物質主義的・「ニュートン型」に矮小化された社会科学は無論さまざまな業績を上げはしたが、大勢において判断すると、方向性において歪んだ認識・判断や考え方や情報を、人類に対して結果としてマインド・コントロールよろしく、提供するものになっていたと思われる。括って言うところらの大部分が西欧文明の一端として、西歐製（メイド・イン・ザ・ウェスト）の学問や思想、あるいはその輸入や加工品だったことも注目される。

社会や人間や国家関係を機械論的・分断・細分的に、形而下的・ニュートン力学的に解しすぎる社会科学が人類・世界・社会・経済を没倫理的にし、それを合理的であると解する、歪んだ世界観や政策観念を生み出している。

現代の社会科学は物質主義的・経験絶対主義的・要素還元主義的・個体還元主義的・機械論的世界観・機械論的人

間観・機械論的自然観・古典物理学の手法を素朴に採用している。数理的な手法の駆使もこのことと結びつくことが多い。

この混乱した事態は一体どこから来たのか。端的には現代の社会科学がすでに時代遅れになった、ニュートンの古典力学を始めとする古典物理学に範を取っているからである。これは方法論的にはデカルトの主客二分法により、認識の主体である人間が認識の客体である自然その他から完全に独立した存在であることを前提にする。また、人間の感覚（いわば5感）とその延長である感覚的な認識だけに信を置く。別の角度からいうと、感覚で分かること以外は信じない。考えようとしなない、あるいは心や精神による知覚・認識の価値を信じない。いささか強く言うると、精神の世界に対して鎖国的な唯物的な認識論に立つ。物質的にあるものにだけ注目する。あるいは物質は分子・原子に還元でき、それらの結合ですべてのものは組み立てられていると解する、要素還元主義的・個体還元主義的な存在論なしは認識論が採用される。

これが社会科学・社会思想にもインパクトを与え、その発想が導入され、経済学を中心に社会科学の全体に影響を及ぼすようになる。社会科学はこれまで一般的に明示的には形而下的な機械論的な宇宙観や人間観の上に立ち、ニュートン方式で組み立てられてきた。その頂点が19世紀のマルクシズムであり、20世紀のアメリカニズムといつてよい。また、無神論的・機械論的な、形而上学に関心を持たぬ形而下的な経済学・政治学・社会学・法学その他である。端的に表現すると、それらの学問には人間らしさや土の香りが感じられない。あるいはこのような感覚を消し去るのが、サイエンスであり、学問であり、教育であるとされている観さえある。これは考古学・文明論・人類学・宇宙論・歴史学・宗教学等に照らし判断すると、また、人類百数十万年の歴史から見るとまことに奇形的な知の体系・価値の体

系であると言えざるものではなからうか。モダニズムは急激に過去のものとなりつつある。

ところが社会科学がその範とした自然科学の領域では、機械論的な存在観は20世紀に急激に過去のものとなりつつある。物質を究極の物質に還元する個体還元主義的な手法は、量子理論・ハイゼンベルクの不確定性原理・アインシュタインの相対性理論、クォーク、セミ・クォーク、ビッグ・バン・セオリーなどの宇宙科学の発展（最近、宇宙の種、銀河系の種の発見など相次いでいる）で超スピードに過去のものとなりつつある。生物学は化学に収斂し、化学は物理学に収斂し、物理学では量子論や相対性理論や最近では進んで意識場論、超相対性理論の必要が説かれたりしている。

このように、機械論的な存在論や世界観が音を立てて崩れつつある。クォークの先は何か。これは非物質の光子の世界とも観念の世界とも言われており、外を見つめたサイエンスの帰結がプラトン・ヘーゲル・老荘が問題にした精神・内を見つめた古来からの実体論ないし存在論と円弧をなしつつ合一しつつある。これが20世紀の知的な帰結である。ニュートンの古典物理学の世界はマクロの部分理論化しており、非物質の世界が生命論とも絡んで、科学的・思想的・学問的な研究主題となっている。この状況に照らすと、人間の生命や観念や心理を重要な要素にする社会科学がいまだに唯物的で機械論的な手法だけに頼っているのは、この学問が自然科学や哲学・人類学等に比して百年くらい遅れていることを意味する。

振り返ってみると、自然科学にしても、プラトン、アリストテレス、トマス・アキナスの「宇宙のロゴス」、あるいは東洋思想における「天」、を否定したのではなく、自然科学ではこのロゴスによって作られた法則性の探求に力を入れたのである。ニュートン、アインシュタインにして然りである。A・スミスにしても究極存在を否定したわけでは

ない。人間の魂 (soul, spirit) を否定したわけではない。(只腰親和『天文学史と道德哲学』多賀出版)。J・S・ミルも然り、おそらくはケインズも然りである。20世紀のアメリカニズムが実質的に無神論的な社会科学の建設に躍気になっているちよūdその時に、自然科学や哲学の分野では、唯物論ないし無神論は皮肉にも崩壊しつつあったのである。

ホリスティックな宇宙観と社会科学の建設が必要

デカルト・ニュートン・ベーコン・ヒューム・ポパー的な機械論的、部分的・裁断的な発想に代わるものは何か。それは宇宙・天体・地球・生物・人間・その社会、あるいはその諸側面などがすべてを通じてホリスティックで相互浸透的な関係が成立し、全体として一つの調和(物心両面の)に達している、あるいは本来がそうであったし(先近代あるいは先古代において)、また、そうあるべきだということの認識に立つ見方であろう。宇宙の発生、天体の成立と運行、地球の生成と運行、諸生物の生存、諸文明の興亡、これらを考えると、われわれは宇宙の法則と調和と「宇宙のロゴス」ないしは意識に思い当らざるをえない。

人間が生き社会が成立し経済や政治や文化や学問が成立するのも、宇宙・人間の相即不離・一体性を離れてありえない。現代の社会科学はこのような宇宙的な合一性を切り離し、結果として人間や地球や宇宙を社会の学問から乱暴に放逐してしまった。そこで、諸分野の社会科学が必要不可欠な前提を考慮に入れていないものになってしまった。人間が生きる社会を問題にするのに、肝腎の人間やその環境たる宇宙・地球・太陽はブラック・ボックスに入れられたままなのである。

20世紀にあつてモダニズム・アメリカニズムの社会諸科学は、切り離しがたく全体としてあるものを誤つて機械論的に分断・細分化し解明できると考える。経済学を例に取ると、この裁断主義・モデル論への極端な傾斜で、誤つた経済像や政策論や経済観を地球上に放散している（過去において何人かの巨匠達が宇宙・人間―社会の全体認識の努力をしたのだが）。この事情は多少の事情の違いがあるにせよ、他の社会科学についても言える。したがつて、それらの個々の学問は誤認が生じる。また、たとえそれらの情報や理論や認識の全体を合計しても、正しい社会観・世界観や政策論や人生観は得られない。部分―全体がホーリスティックに相互浸透的に存在するものは、すべてが感応し浸透しあつている。個々の部分の内部に宇宙や世界の全体が浸透している。個々人に、経済に、社会に、政治に、法律に、宇宙の全体がホーリスティックに内包され、かつそれらは地球や宇宙と感応しあつている。

モダニズムの社会科学はこの辺の事情を無視しがちである。経済学が主に問題にする経済人（ホモ・エコノミックス）は、他者とは全く別の精神世界を内包することが顧慮されない、いわばものとして肉体としての人間である。また、経済や企業・家計・財政・世界経済とは概して精神や心のない「物」だと解されている（そのなかに有機的で精神的な人間も生物も、地球も宇宙や政治・社会・文化・宗教等も浸透しているのに）。社会学は社会や集団や組織は物だと考える傾向が強い（経済と同じで、その中には宇宙や太陽・地球・諸生物、経済その他人間等が浸透しているのに）。現代の政治学においては、政治は分立して存在する互いに別の個人の政治資源をめぐる主にその分配や利用方法をめぐる闘争ないし競争と解されており、国家（現在の国際政治学で特に目立つが）や公共機関はたんなる物と解される傾向がある。先古代あるいは古代以来重視されてきた友愛・徳義・正義を軸にする政治（アリストテレスや孔子など）という実体論的な、あるいは「宇宙のロゴス」に発する徳義による政治の、ザインとゾレンの観点がきわめて希

薄になっている感がある。初期にあつた自然法概念とリンクするロック・ルソーらの社会契約説に裏付けられる政治、政治に求められる徳義・正当性が希薄になっている（とりわけ20世紀の政治学にあつては）。

法学においてはどうか。法学が問題とする個人とは個別的な他者と別のもの、世界・宇宙から離れて、独立して存在する孤獨な個人のものである。ところが、この個人は実は人類・諸生物・自然・地球・銀河系・宇宙と同根の存在なのである。むしろ個人はたんなる身体・肉体でもない。「深層心理」（ユング・マズロ）において超個帯域的なレベルを持つ、魂（spirit, soul）をもつ存在である。さらにこの魂なるものは肉体とは別で三次元以外の存在であり（相対性理論でも、空間や時間は相対化されている。物質もそうである）、ついでに記すと山・海・岩石・森林・さまざまな生き物に非物質の精神とも靈気ともいえるものがないという保障が無い。法学の分野でも初期にあつた自然法に基づく法理念や天賦の人権・基本的人権の概念が、20世紀には磨耗しつつある感がある。

現代の社会科学において、「宇宙のロゴス」「絶対精神」（プラトン・ヘーゲル）の忘失が一般的である。友愛宇宙、物質的万有引力と異なり、すべてに宿るかと思われる友愛の精神的引力ないしは精神的・心理的な紐帯は、近・現代とりわけ現代の自然科学や人文科学・諸学問・思想においては、奇妙に忘失されるか、あるいは注目されていない。物質主義の知の体系に偏りすぎた現代の学問は「山川草木悉皆仏生」（釈迦・老子）の理をもう一度想起し、また「宇宙のロゴス」の分岐ともいえるさまざまなところに遍満する靈気のある存在を思い出す必要もあろう。

物質主義的に一元論的で機械論的な分断・細分主義、形而下的な学問に墮している社会科学は、経済学・政治学・社会学・法学などの協同はむろんのこと、人類学・考古学・民俗学・未来論・第三世界研究・歴史学・文明論・哲学・宗教ないし宗教学、人間論・存在論（オントロジー）・宇宙論等・環境論（エコロジー）との多元的な協同・彫琢をお

こない、全体・部分相即の無機・有機・形而下・形而上の統合たるホリスティックな学問に転換していかざるをえないであろう。

参考文献 「社会科学の新パラダイムの提起と友愛（共生）宇宙」筑波大学大学院社会科学研究所『社会科学の新しいパラダイム』所収、拙著『新ユートピア経済学』（ともに、たま出版）「現代社会の仕組みと友愛社会主義」（『知のフロンティア』（勁草書房）、岸根卓郎『文明論』（東洋経済）等

（後記）本論文は、筆者が1996年11月9日経済学史学会全国大会でおこなった報告の要旨に対応する。当日はさいわい、筆者の報告にたいして水田洋教授をはじめ熱心な質疑・内容ある討議が筆者との間で長時間にわたりおこなわれた。

（追記）この論文は私が筑波大学在任中の最後の論文になると思います。思い返せば、本学創始期の着任以来、二十三年間の歳月が流れたことになります。国際一級・新構想・学際性のモットーをかかげ山林原野を切り拓いて作られた学園都市の本大学に私は若い情熱を感じてその一員となったわけです。初心忘るべからずの心をもって私は学問研究と教育に力を注いで来ました。そして、日本の状況の中で出来る範囲でタコツボ式でなく、輸入型・守旧型でなく、輸出できる学際的でオリジナルで国際的な業績を残すのに、誠心誠意この年月を費しました。これは私の学的生涯のかなり大きな部分を占める時期で、十冊の単著や数多の論文や諸活動はその結晶です。この自由な営為をいろいろな

形で支えて戴いた、筑波大学の諸先生・学生・職員の皆様はこの紙面を借りて厚くお礼申し上げます。終わりに大学に自由な雰囲気が保たれつつさらなる創造的の場となることを切に祈ります。